

歴史的街区におけるコミュニティ形成に関する基礎的研究 - 町並の変化要因について -

日大生産工(院) 岡田 裕己
日大生産工 宮崎 隆昌

1. はじめに

1.1 研究背景と目的

イタリアの建築家アルド・ロッシは「日本の都市についてどう思うか」と問われた際、「これは都市ではない」と答えた。これと同じく建築家の團紀彦も我が国の景観に対して疑念を抱いている¹⁾。

我が国の町並の個性は、地形との応答の中で小地区がそれぞれどのように形つくられてきたのかという点とその重層した蓄積に特色があり、それは傍目からは読み取りにくい。もっとも目につきやすい街路景観だけに着目すると、まさしく「都市になっていない」とも表現されるような悲惨な状況にあるといわれても否定出来ない一面がある。

その背景のひとつとして高度経済成長と建築技術の発達がある。高度経済成長によって、開発技術や生産技術が発達し、便利な生活を送るために家の中に様々な道具が増えていった。また建築技術の発達により、木造だけではなくコンクリート造などの建物が増加し、2階建て程度の建物から最近では高層の建物が多く建ち並ぶようになった。

その結果、家から屋外にもものがあふれ出し、様々なつくりの建物が乱雑に建設されることで町並が大きく変化していった。

そこで本研究では、歴史的街区における町並の変化に着目し、その変化に影響を与えている要素を明らかにすることを目的としている。

1.2 既往研究と本研究の位置付け

町並に影響を与える要素についての研究として、田口ら²⁾の研究が挙げられる。田口らは古い町・町並としての雰囲気醸し出す要素とは何かを検討し、感覚的な指摘で要素を取り上げている。

本研究では、広い視野や部分的な箇所では建築物だけではなく様々な要素をとりあげ、具体的な数字を基に歴史的街区の町並変化を検証し分析をする。

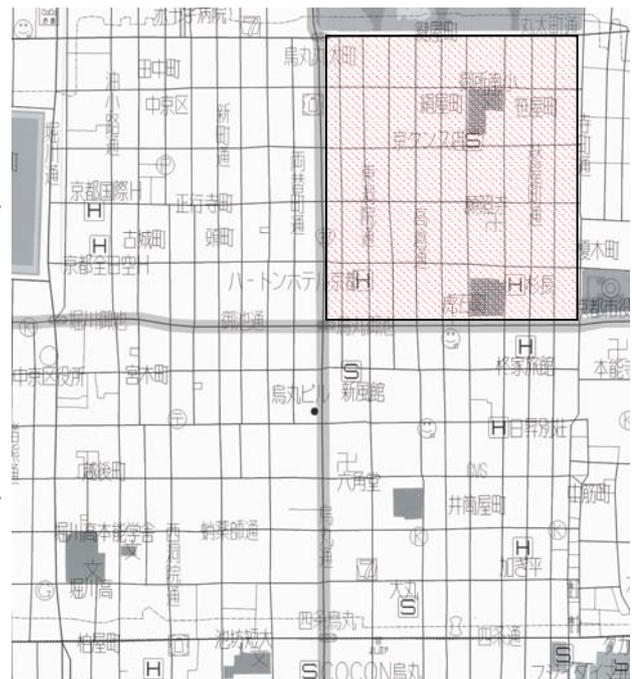


Fig.1 研究対象地域

Fundamental study about the community formation in the historic area.

- About the change factor of the street-

Yuki OKADA, Takamasa MIYAZAKI

2. 研究概要

2.1 研究対象地域

京都は平安京以来 1200 年の歴史を持つ格子状街路によって区画されたブロックがあり、現在もなお生き続けている。また、京都市中京区夷町は歴史的な町の構成を空間的にも、また、社会的にも受け継ぎ明確な近隣空間単位を形成している 1 つの町内である。

本研究は夷町を中心とした丸太町通り、烏丸通り、御池通り、寺町通りの 4 通りに囲われた地域を研究対象地域とする (Fig.1)。

2.2 調査方法

2010 年 9 月 13~17 日の 5 日間、研究対象地内の町家の街路における住居前面のあふれ出しの採取、街路に接する建物ファサードの写真撮影を行った。これらのデータを分析に用いる。

2.3 研究方法

町並の変化要因を調べるため、人々の能動的動作によって生じる現象 (アクティビティ状況) に着目し、外部表象の差異性を以下のように調べ整理する。

1. 住宅地図ソフト (株式会社ゼンリン: デジタウン - 中京区, 以下デジタウンと記す.) を用い各建物の階数調査
2. 町家の分布調査
3. あふれ出しによる分析

2.4.1 階数調査による分析

まず研究対象地域を広い視野で見る。今日では高層の建物が増加しているので建物の高さの高低差が様々である。

そこでデジタウンを用いて各建物の階数調査を行った。そして各建物を階数別に色分けをする (Fig.2)。橙色は 1 番低い項目で 1~2 階、次に緑色で 3~5 階、紫色で 6~9 階、黒色で 10 階以上と順に続く。

次にその色分けデータを用いて各項目の建物の数を数える (Table.1)。

街路に面している建物の階数の変化をグラフに表す。例として、この地域では主要道路の、特に御池通りに接している建物の階数の

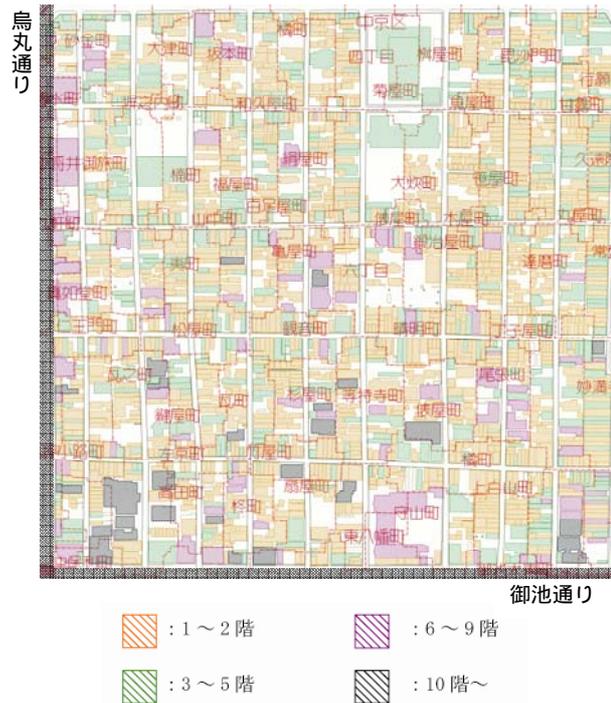


Fig.2 建物の階数別色分け

Table.1 階数別建物数

階数	棟数
1~2 階	1663 棟
3~5 階	482 棟
6~9 階	91 棟
10 階~	26 棟

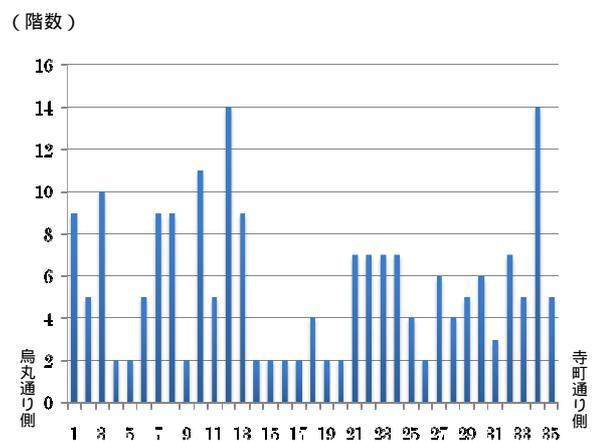


Fig.3 御池通りに接している建物の高さの変化

変化を，烏丸通りから寺町通りにかけて 35 棟をグラフ化し，主要道路では市街地形成の輪郭にどのような変化があるのかを把握する (Fig.5).

2.4.2 町家の分布調査による分析

研究対象地域の町家の分布の色分けを，デジタウンを用いて行い，町家の残存状況を確認する (Fig.4). なお本研究における全建物数は現地にて住宅地図を用い，目視により確認出来た建物の棟数である．その残存状況の割合のグラフ化を研究対象地域全体，主要道路の御池通り，烏丸通りで行った (Fig.5).

2.4.3 あふれ出しによる分析

次に研究対象地域を広い視野から部分的な箇所を取り上げ，あふれ出しの方法により分析をする．1960 年代の高度経済成長により，プラスチックや家庭電器などの流通革命が進み，道具が多くあふれ出るようになった．だがそれは，京都など歴史的街区にはあまりそぐわない景観となっていた．あふれ出しにはどのようなものがあるのかを調査し分析をする (Table.2) *1).

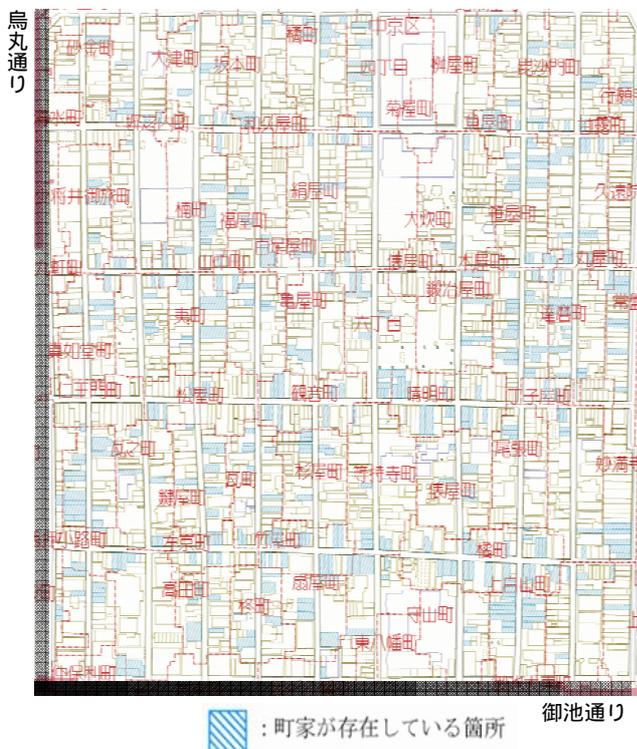
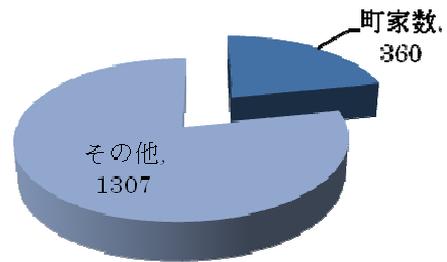
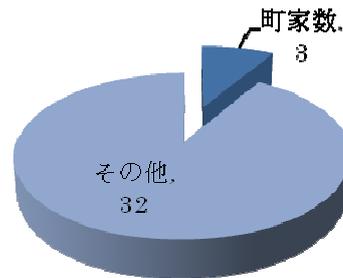


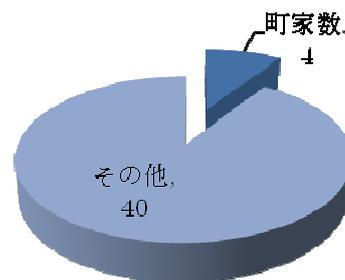
Fig.4 町家の残存状況



研究対象地域全体



烏丸通り



御池通り

Fig.5 町家の存在数

Table.2 あふれ出しの種類と個数

種類	個数
自転車	147
室外機	49
車	26
バイク	14
小箱	9
バケツ	7
カラーコーン	6
ゴミ箱	5
ホース	4
廃材	4
脚立	2
自動販売機	2
倉庫	1
棚	1

4.1 階数調査による分析結果

Fig.2 より主要道路の御池通りには建築面積の大きな中層・高層以上の建物が立ち並び、都市の輪郭に大きな変化を及ぼしていることが分かる。また、Table.1 より研究対象地域における建物総数の26%が中層・高層の建物であることが把握できる。Fig.2, Fig.3 より主要道路においては低層の建物よりも中層・高層の建物のほうが多く存在していることが把握できる。

4.2 町家の分布調査による分析結果

研究対象地区において、街路に接している住宅で確認できた建物総数1667棟のうち、360棟を町家であると推定した。研究対象地域全体の町家の存在率は全体の20%であった。また主要道路の御池通り・烏丸通りに接している町家の存在率は、御池通りにおいては建物総数35棟のうち町家の存在数は3棟で存在率は9%であった。烏丸通りにおいては建物総数44棟のうち、町家の存在数は4棟で存在率は9%であることがわかった。

4.3 あふれ出しによる分析結果

研究対象地域におけるあふれ出しを行っている町家は154棟で、研究対象地域全体のあふれ出しの総数は292個であった。これらのことから、研究対象地域の総町家数の43%の町家があふれ出しをしていることになる。またあふれ出しをしている町家の平均あふれ出し数は1.90個であった。

5.まとめ

歴史的街区における町並の変化要因の検証として以下の知見が得られた。

1. 建築技術の発達により、今日では様々な形態の建物が増え、それが市街地形成の輪郭に大きな影響を与えている。
2. 芦原³⁾により、格子は内外の空間秩序に流動性を与え、町並みを活気付けるのに重大な役割を果たして、格子によって、住まいと「おもて」の街路とがつながることができ、一方ではプライバシーを保ちながら、他方では緊密なる近隣関係を保つことができるとい

うことが明らかになっている。したがって、町家が減少するとその分コミュニティの場が減少する。よって、町家の減少が人々のコミュニティの面において町並に影響を与えていると考えられる。

3. 町家のあふれ出しは町並が変化していった要因として考えられたため調査を進めたが、青木ら³⁾は一般的には、単なるあふれ出しであると思われる自転車の存在もコミュニティの親密性を高める説を論じている。今回の調査では自転車があふれ出しの数として1番多かったことから交通便利性に対する住民の共感がコミュニティ意識を高めると考えられる。以上より今後の課題としては、現地においてあふれ出しに対するヒアリング調査を行い用途的に感じられる景観と、住民の景観感情の差異を検証していきたい。

「補注」

*1) 居住者と街路との関係性を図る為、本研究では街路から最も影響を受ける住居正面ファサード1階部分を対象とした。

「参考文献」

- 1) 團紀彦,「日本の街路景観 新町家論, 森地茂・篠原修編, 都市の未来」, 日本経済新聞社, 2003年
- 2) 田口勇貴, 清水隆宏, 町並みに影響を与える要素についての基礎的考察 - 岐阜県笠松町の歴史的な町並みを対象として, 日本建築学会東海支部研究報告書, No. 47, (2009), pp. 589-592.
- 3) 芦原義信, 街並みの美学, 岩波書店, 1990, pp. 61-66.
- 4) 青木義次, 湯浅義晴, 大佛俊泰, あふれ出しの社会心理学的効果 - 路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証 その2, 日本建築学会計画系論文集, No. 457, (1994. 3), pp. 125-132.
- 5) 島村昇, 鈴鹿幸雄, 京の町家, 鹿島出版会, 1971, pp. 12-39.